

ニッポンハム食の未来財団 2024 年度第一期 団体活動支援助成 完了報告書

企画活動名	第 42 回 喘息・アレルギー児サマーキャンプ
フリガナ	イトウ アイ
申請者（代表者）氏名	伊藤 愛
団体名（正式名称）	団体名：群馬小児喘息・アレルギー親の会 申請者の役職・肩書など：会長

## 1. 活動結果要約

運動や食事面にて制約の多い小児喘息・アレルギー疾患をもつ子どもたち。

広大な自然の中、仲間とともに思いきり遊び、駆け回り、学び、何よりも「同じ釜の飯を食う」という経験は、健やかな新進の成長における貴重な経験となった。日頃、保護者同伴による行動が必要な場面も少なくないが、本活動中は小児アレルギー専門医や群馬大学学生ボランティアサークル所属の学生立ち合いのもと、親子それぞれの活動が実現し、子どもの自立心育むきかけをつかむことができた。

保護者においては個人での情報収集には限界があり、手探りでの子育ての中、アレルギー専門医による講演や質疑応答、親同士の交流がもてたことは、心の安定に繋がる大切な機会となった。

また、参加児童の年齢が1歳から中学生までと幅が広いことで、子どもがどのように成長し、悩み解決をしていくかを知ることができる。身近に相談できる人が少ない環境で制約のある生活をしている参加者は、わが子の未来を垣間見ることができる。また経験者として話しをすることで、ふりかえりをすることができ、貴重なピアサポートの場にもなっている。

いずれにせよ、日常生活において同じ環境下の人に出会うことは容易ではなく、このような間を設けることの必要性を実感し、今後も継続し活動をおこなっていきたいと思う。

## 2. 活動目的

日常生活では、アレルギー疾患のこどもやその家族が知り合う機会は少なく、患児・保護者ともに孤独を感じることが多い。アレルギーキャンプでは、多くのアレルギー児やその家族が参加することで、自分たちだけではないことを知り、仲間がいることを得る機会となっている。

キャンプには多くの小児科・アレルギー専門医が計画段階から参画していることで、保護者だけでは知りえないことも知れる機会となり、内容を変更することもできるため、本番は一層安心安全に過ごすことができる。

そして、学校生活の中で、給食の時間は別メニューの食事を、別の机で食べるなどの対応の患児も多く、日頃孤独を感じる人が多い子ども達が、仲間がいるということを知り、未来を創造することもできる機会を設けることもとても必要な経験となっている。

群馬大学学生ボランティアサークル（AAA☆Kids）も計画段階から参画していることで、医療従事者や保護者よりも参加する子ども達に近い、お兄さんやお姉さんという立場で関わる事ができている。患児には3者（医療従事者・保護者・学生）が多角的に関わることで、充実した環境を提供することができている。

## 3. 活動方法

数年ぶりの宿泊キャンプの開催となり、参加する子どもやその家族が交流しながら長時間を一緒に過ごすことができた。

子供向けの勉強会では群馬県作成の紙芝居を教材として勉強し、自分のアレルギーカードを作成しながら、自分のことだけではなく一緒に参加した子ども達も同じようにアレルギーを抱え、悩み制限のある中で過ごしていることを知ってもらうことができた。

また、宿泊する部屋での交流も可能となった。日頃のスキンケアのことや食事のことなどを同じ時間を過ごすことでお互いに共有することもでき、身近に感じてもらえた。

初めての施設で、使い勝手が分からないことがあり、他団体も同じ日に利用していることで食事時間や場所など、他団体と食事が交わってしないように細心の注意をした。使用する部屋の掃除が難しく課題が多くあった。

夜祭りを味わってもらいたいと、群馬大学学生ボランティアサークルが日中の活動以外にも考えて準備をしてくれたおかげで、お祭り気分を少し味わうことができた。

当初の予定内容が施設ルールで通らないものがあり、直前での変更もあったが学生たちが対応を頑張ってくれた。

食事後は、広大な広場に面していたので自由に遊ぶこともできた。施設自体が広大だったため、スケジュールに合わせて決まっている場所への移動は、幼少な子どもたちにとっては大きな負担となってしまった。

食事面では、親の会役員とお助け隊が準備をすることで、参加者全員が安心安全に食べることができるメニューの提供をした。

調理場での火は、薪での火起こしのみしか許可されず 2 食分の火起こしから始まることが大変で、調理器具もすべて持ち込みになるため、煤を洗い落とすことなどがとても大変で、食材の中に入ってしまうように配慮することにも苦勞をした。

また、施設内のコンセント利用許可がおりず、白米を炊くことができなかった。夕食分の白米は、近隣のほっともつとに白米を注文し、朝食用の白米は近隣住民の協力を仰ぎ、炊飯するためにコンセントを早朝から使用させていただける手配もできていたが、建物から出てもいい時間が決まっており、早めの準備をすることができなかった。

役員で 1 番家が近い人間が宿泊せずに帰宅し、自宅で炊けるだけの炊飯器で白米を準備し、不足分はコンビニエンスストアのおにぎりでの対応となってしまう、夜間何かあったときに対応できる役員が 1 名減ってしまった。

また、酷暑の中での開催であったが、日中も依頼をしないとエアコンを切ったままになってしま

うこと、子ども達が遊ぶホールは大型扇風機のみでの対応だったこと、夜中に部屋のエアコンスイッチが自動的に切られてしまい、決まった時間までオンにならないことで、アトピー性皮膚炎のある患児には苦勞をかけた。施設へも再三お願いをして申し入れもしたが、夜中のエアコンは許可がおりず残念だった。

キャンプ後のふりかえりでも出た問題点は、使用する施設を他施設にすることで解決することが多くあった。

ただ、その施設を選択した理由は、小学校の課外学習で使用する人が多い施設だということもあり、親子で使用することで、実際子どもが学校単位で使用する際に、現地を知っていることで対応できることが多いだろうと思い、決めた場所だっただけに非常に残念であった。

#### 4. 結果及び波及効果

2019年夏以来の宿泊型キャンプの再開となり、日帰り組参加だけではなく宿泊した参加者には、長時間を共有してもらうことができ、また一緒に部屋で過ごし寝ることで一層絆が深まったと感じることがたくさんあった。

小学生以上だけの予定であったアレルギー専門医による勉強会は、未就学児も一緒に開催することができ、自分のからだのことや疾患について知るきっかけや、日頃のアレルギー疾患への対策や注意点に関する疑問を解決できる場となった。

また、子ども達が自らアレルギーや自分の身体で、疑問に思っていたことを同席した学生や医師に話すこともあった。この場には保護者が介入しないことで、子ども達が自由に発言できる環境を整えている。診察時には保護者と医師が話すことが多く、患児が自ら発言するきっかけを作ることも目的としており、子ども同士でアレルギーの話しや日頃の生活についても意見交換をする場面もあった。

医師が協同で活動をすることで、日頃制約の多い子ども達は普段できないようなことにもチャレンジする機会や心から楽しめる時間を提供することができ、子ども達の生活のQOLは参加前よりもあげることができた。

学校生活の中で、給食の時間は別メニューの食事を、別の机で食べるなどの対応の患児も多く、初めて同じメニューの食事を一緒に食べることができた！不安のない環境での食事を安心して食べることができた！など、本キャンプを通して体験する参加者もあり、日頃孤独を感じる人が多いが参加することで仲間がいるということを知り、未来を創造することもできる機会を設けることも目的となっている。

お風呂での身体の洗い方や、お風呂後の薬の塗布についてなど、保護者同士で話すだけでは伝えきれないことを体感してもらうこともできた。

また、開会時には引っ込み思案だった子ども達も、時間の経過とともに慣れてきたことで学生や参加患児とも交流が深まった。

群馬大学学生ボランティアサークル（AAA☆Kids）も計画段階から参画していることで、医療従事者や保護者よりも参加する子ども達に近い、お兄さんやお姉さんという立場で関わり、準備段階では小児科医・アレルギー専門医からの勉強会や親の会からの勉強会を通し、大学の勉強では知りえない内容などを伝え学ぶことができ、将来医療従事者になる学生が多いサークルなので、社会に出てからもアレルギー児のことを理解している医療従事者が多岐にわたる職業へ就くことで、理解のある医療従事者が小児科以外にも在籍している環境整備にも役立っている。

## 5. 今後の活動について

宿泊型キャンプを継続し、参加形態を日帰りと宿泊とすることで、参加しやすい環境を整えて、孤独を感じ、悩みの解決方法を探りながら生活をしているアレルギー患児とその家族の憩いの場になるだけでなく、正しいアレルギーの情報を知る場所の提供をしていきたい。

参加を躊躇している家族がいることも事実としてあり、もっと参加しやすい環境を整えていくことが必要だと痛感している。

また、日頃だと試すことができないアレルギー対応商品を知り、情報を入手できる場所となることで、患児の食生活が少しでも潤沢なものに繋がってほしい。

安心安全な環境を提供することを第一に考え、夏キャンプから約半年後の2月頃に毎年開催している冬の交流会は再開の場にもなり、冬は日帰り開催となっているため、夏キャンプに興味をもっている家族がお試しで参加してみることもつながっている。

冬の交流会では、保護者にも食事準備に入っただくことで、手を動かしながらもピアサポートの場面を設けることができたので、夏のキャンプでも取り入れていく予定になっている。

今後は、ママだけのランチ会や交流会も年に何回か開催できればいいと思っている。

親の会役員はコロナ禍を通して、メンバーの入れ替わりもあり経験値が下がっている分、助け合い、支え合っている。役員はアレルギー患児の保護者となるので、参加者の気持ちにも非常に近い。

完全ボランティアでの活動となるため、役員を増員し世代交代を進めていくことが目下の課題でもある。

以上